



TITLE:

陰茎のモンドール氏病

AUTHOR(S):

加藤, 篤二; 小松, 洋輔

CITATION:

加藤, 篤二 ...[et al]. 陰茎のモンドール氏病. 泌尿器科紀要 1972, 18(7): 516-518

ISSUE DATE:

1972-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121395>

RIGHT:

陰茎のモンドール氏病

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二
小 松 洋 輔

MONDOR'S DISEASE IN THE PENIS

Tokuji KATŌ and Yosuke KOMATSU

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 34-year-old man was seen with an indolent cord-like induration at the corona glandis of the penis. The lesion was removed and pathohistological findings were consistent with Mondor's disease. Dilated lymph channels were conspicuous but without inflammatory changes or venous dilatation.

はじめに

陰茎の背面に特異な蛇行状の硬結をきたし、摘出した病理学所見よりモンドール氏病と診断した症例についてのべる。

症 例

患者：34才の男子，初診1972.3.10.

主訴：陰茎冠状溝の蛇行状硬結

個人歴：特記すべきものはない。川魚生食の既往もなく性病感染の機会もないという。

現症：2年前よりたびたび陰茎背面の冠状溝に疼痛のない索状硬結をきたし，そのたびに消炎剤の投与をうけて軽快することをくり返してきた。今回は数週間より同様の皮疹をきたして治癒しないという。

所見：体格中等度，栄養佳良，胸部に異常なく腹部で両腎をふれず，膀胱部は圧痛を欠く。外陰部では外尿道口は正常，陰茎は包茎でなく大きさも普通，背面の冠状溝より0.5 cmをへだてて横走する蛇行状の硬結がみられ，幅は約0.7 cmに隆起して陰茎のほぼ半周を取り巻いている（Fig. 1, 2）。表面の皮膚に発赤なく硬結は皮膚と癒着しているが基底とのそれはない。自発痛ないし圧痛は全くない。触診の感じは針金状の硬結である。どこにも近傍に初期硬結らしい皮疹あるいは潰瘍もなく陰茎根部ならびに両側ソケイリンパ節の腫脹はない。睪丸，副睪丸，精管，前立腺は全く正常で，尿も清澄，血清ワ氏反応陰性。

以上診断として，まず梅毒性初期硬結ならびにリン

パ管炎であるが感染の機会を欠きソケイリンパ節の腫脹もない。リンパ管腫とすれば多くは先天性であるが本例は2年来のもので皮疹に消長がある。雷魚によるgnathostomiasis または creeping disease としてはそれらしい既往もない。結局，硬化性リンパ管炎として同年3月17日手術をおこなった。冠状溝に平行に硬結を中心として輪状切開を加えると皮下に索状のリンパ管らしい囊腫が透明な内容液で緊満しており，切開のさい一部リンパ液が排出された。内容を検するに淡黄色透明な漿液であった。摘出物の病理所見では静脈と怒張したリンパ管がみられるが管壁の肥厚，血栓形成，管周辺の結合組織の増殖はみられず周辺の炎症もきわめて軽度であった（Fig. 3, 4）。

ま と め

主として前胸部の乳房近傍に無痛性の索状硬結をきたす疾患は Mondor が1939年 Mondor 病と命名したのに始まる。懸垂乳房において静脈，リンパ流の緩慢，うったいを起こすことが原因と考えられているがなお不明な点が多い。臨床上皮下に針金様の硬い触感を呈するが，これにたいして Mondor のごとく組織学的に硬化性静脈内膜炎または血栓性静脈炎などと静脈の変化をあげる人は多いが，Jönsson はこれに対しリンパ管炎を主体であるとし，D. Turner もリンパ管の硬化像をあげている。本邦の数少ない報告例では例えば井口は静脈炎のある例，あるいは炎症のない例を，三瀬らは静脈とリンパ管の共存例をあげているご

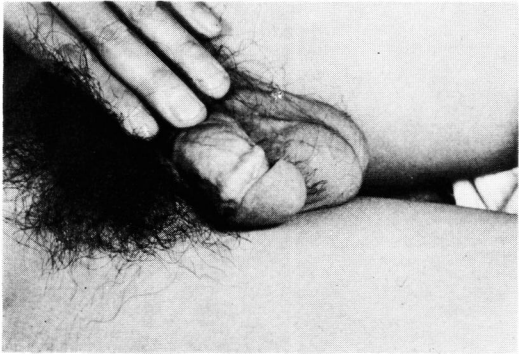


Fig. 1



Fig. 2

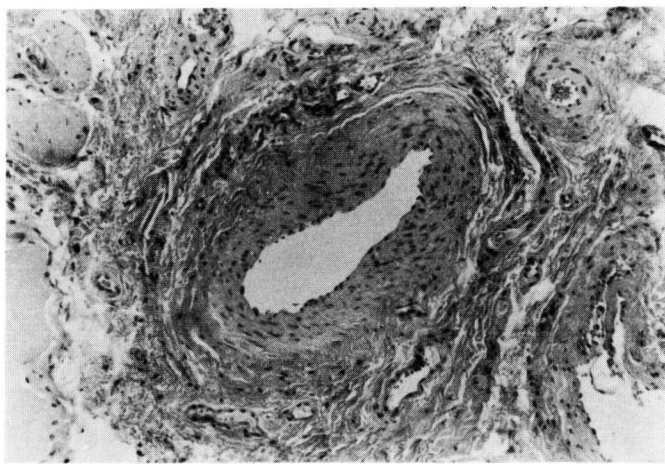


Fig. 3

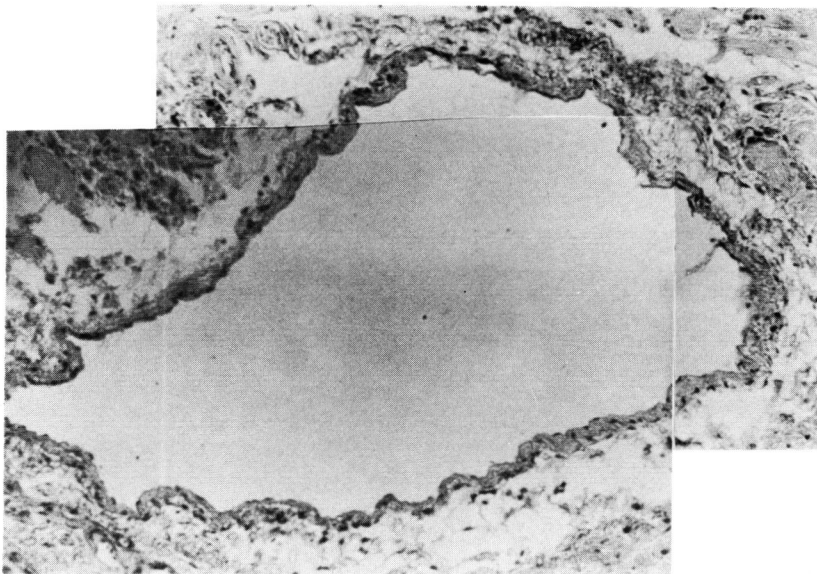


Fig. 4

とく雑多な組織像である。このうち陰基に発した例としては重松らのそれが最初で氏らは炎症のあるリンパ管腔を認めてこれを硬化性リンパ管炎として記載しているが、高橋らの症例には炎症像をかいている。また浜田らの症例は静脈病変を主体としたものである。ところで本例は静脈のほかには拡張著しいリンパ管腔を認めているが、とくに炎症像とみられる変化に乏しい。陰基も乳房と同じく懸垂臓器であるからこのような病変が起こってもけっして不思議でなく、伸縮に応じてリンパ管の一時的閉塞の発生が主因と考えられるが鑑別の点で診断が困難であった症例であるのでここに記

載した。

参 考 文 献

- 1) 三瀬ら：外科宝鑑，28：3395，1959.
- 2) 井口：臨床外科，12：352，1957.
- 3) 重松ら：泌尿紀要，11：409，1965.
- 4) 浜田ら：日皮誌．第71回学会総会号．206，1972.
- 5) 高橋ら：臨泌，22：412，1968.

(1972年7月3日 超特別掲載受付)